

ISSN 0913-9729

KLS 27

PROCEEDINGS OF THE THIRTY-FIRST ANNUAL MEETING

June 10-11, 2006

KANSAI LINGUISTIC SOCIETY

2007

目 次

研究発表

「主観性/客観性」から見た日本語の授受構文について		
一「話し手/主語指向性」、「受け手/与え手指向性」の観点から—	澤 田 淳	1
疑問詞と「かどうか」の共起を許す心理的要因について	森 貞	12
語義の関係性および語義の認識の程度に注目した多義ネットワークの構築： 図形○を材料として	寺 西 隆 弘	23
On Blended Referents	安 原 和 也	34
新造オノマトペを通して見る有声音・無声音の音象徴とその比喩性—SD法による分析を中心に—		
	井 上 加 寿 子	45
Reduplication and the Spread of <i>Rendaku</i> into Sino-Japanese	Timothy J. Vance	56
メタファー表現の形式とその効果 —品詞の相違の観点から—	岩 橋 一 樹	65
メタファーの解釈における参与者役割のフレーム間相互照合	野 澤 元・横 森 大 輔	76
並列型トートロジーの解釈スキーマ	酒 井 智 宏	87
中国語ではなぜ“吃了飯嗎?”ではなく“吃飯了嗎?”と挨拶するのか?—中国語における“了”の文終止問題—		
	劉 綺 紋	98
A Semantic Constraint on Direct Objects of Motion Compounds in Chinese	大 崎 梓	109
韓国語の「V- <i>eo/a-beorida</i> 」文、「V- <i>go-malda</i> 」文と「Vてしまう」文の意味解釈と統語構造	朴 壩 一	120
Complex Motion Predicates and the Pre-verbal Negative <i>an</i> in Korean	和 田 学	131
いわゆる「主要部内在型関係節」の認知言語学的分析—メトニミーの下位区分と意味の二重構造から—		
	山 本 幸 一	141
語のカテゴリーとプロトタイプの実験を用いた検証：「流れた」を例として	鈴 木 幸 平	151
日本語使役移動表現における「起点」・「着点」表現の認知的非対称性	石 橋 美 由 紀	162
言語に現れる「非対称性」： <i>up</i> と <i>down</i> を例にして	大 谷 直 輝	173
A Unified Analysis of Four Types of Focus Movement in English	三 村 敬 之	184
The Enhancement/Repression of Phasehood	内 芝 慎 也	195
A Comparative Acquisition Study of Relative Clauses	原 田 かづ子	206
連体修飾節内における時制形式	福 原 香 織	217
日本語「名詞句内数量詞」の位置と意味	岩 田 一 成	226
日本語の機能後置詞「に」に対する提言	井 上 聖 子	237
英語不定名詞句の特定性と広い作用域解釈	森 香 奈 絵	248
英語におけるA-N構文にみられる意味的特徴について	金 澤 俊 吾	259
項構造形成とManner-Mean Component—Instrument/Locative中間構文の観点から—	関 敬 一 郎	270
ハンガリー語動詞接頭辞と語形成	江 口 清 子	281
日本語とベンガル語における他称詞の対照研究：親族に関する他称詞を中心に	Md. Monir Uddin	292

ワークショップ

アクセント研究の諸相	窪菌晴夫(代表者), 磯利古幹雄, 清水泰行, 田中真一	303
日本語構文研究への新アプローチ: 「意味と形式」再考	黒田航(代表者), 李在鎬, 中本敬子, 永田由香	306
「移動」の有無についての考察—様々な統語現象を題材に—	北尾泰幸(代表者), 三村仁彦, 久米美帆, 内芝慎也	311
第31回 関西言語学会プログラム (甲南大学 2006年6月10日・11日)		315
事務局便り		319

並列型トートロジーの解釈スキーマ

酒井 智宏

(日本学術振興会特別研究員)

1. 目的

この論文の目的は、メンタル・スペース理論(Fauconnier 1985, 1997)を拡張した枠組みを用いて、並列型トートロジー「XはX、YはYだ」の解釈を領域間の情報転送の観点から定式化することである。第2節では先行研究の問題点を指摘し、第3節ではそれらに代わる理論的枠組みを提示する。第4節では、並列型トートロジーと説明拒否トートロジーの類似性を指摘し、それに基づいて並列型トートロジーの意味論を定式化する。

2. 並列型トートロジーに関する先行研究

2.1 坂原 (1992, 2002)

坂原 (1992, 2002)は記述文トートロジー「XはXだ」を大きく二つに分類している。第一のものは同質化トートロジーと呼ばれ、「どんなXもXだ」と解釈される

¹。第二のものは差異化トートロジーと呼ばれ、(1-2)のように「Xをそれと類似したYとはっきり区別せよ」と解釈される。差異化トートロジーが本論文の並列型トートロジーに相当する。

(1) 坂原による並列型トートロジーの解釈図式

A: XはYと似たようなものだ。

B: XはX、YはYだ。

ここで、XとYはあるカテゴリーWのメンバー名²³

Bの発話の解釈: Xをそれと類似したYとはっきり区別せよ。

= Wのメンバー間の差異の強調

(2) A: どうしてタマばかりかわいがるの?(シロだって同じ猫なのに)

B: シロはシロ、タマはタマだ²⁴。

ここではXとYがともにカテゴリーWのメンバーであることが重要であり、並列型トートロジーは、XとYが同一のカテゴリーWに属することを認めつつも、両者の差異を強調する。

2.2 小屋 (2002)

小屋 (2002)は、坂原のいうWの存在が明らかでない場合があるため、Wを定式化から排除し、(3)のような解釈図式を提案している。

(3) 小屋による並列型トートロジーの解釈図式

「XはX、YはYだ」: XはYではない

ここでは「Yでない」の代わりに「Xだ」が用いられており、「XはX、YはYだ」は全体として、「XはYでなく、YはXでない」と解釈される。この図式は、XとYの差異

が強調されている点では坂原の図式と同一である。

小屋は並列型トートロジーが同質化トートロジーと異なり X の属性が問題にならないことを指摘している。すなわち、「X は X だ」の解釈に「X らしさ」は関与しない。例えば、(4)において「それらしさ」「これらしさ」といったことは一切関係がなく、単にそれとこれを区別することだけが問題となる⁵。

(4) それはそれ、これはこれだ。

これに対して、同質化トートロジー(5)では、「イチローらしさ」が問題となっている。

(5) やっぱりイチローはイチローだ。よく打つな。

この観察は妥当であり、トートロジーの理論はこの事実を説明できるものでなければならぬ。

2.3 問題点

坂原 (1992, 2002) と小屋 (2002) の分析には 3 つの問題点がある。

2.3.1 形式

坂原 (1992, 2002) の分析では、メンバー名を用いたトートロジーがメンバー間の差異を強調する理由が説明できない。この問題に対しては、並列型トートロジー「X は X、Y は Y」を定形文とし、その構文的意味として「X と Y をはっきり区別せよ」を指定するという方策が考えられるが、並列型トートロジーが完全な定形文ではないことを示す証拠がある。第一に、坂原が指摘するように、並列の形式を取らなくとも同様の解釈を持ちうる。例えば(6b)は文脈に応じて(6a)と同義となりうる。

(6) a. 君は君、僕は僕だ。

b. 僕は僕だ。

第二に、並列型トートロジーは英語やフランス語などの他の言語においても観察される(Wierzbicka 1987、藤田 1988、坂原 1992、Cadiot & Nemo 1997)。こうした事実から、並列型トートロジーは計算機構による意味の算出過程を伴う表現形式であると考えられる⁶。したがって、並列型トートロジーの形式と意味との対応関係を定式化する必要がある。

これに対して、小屋 (2002) は「X だ」が「Y でない」を意味するとしているので、一応は形式と意味の関係を述べていると言える。この分析の問題点については 2.3.3 節で述べる。

2.3.2 自明の理

坂原 (1992, 2002) によると、同質化トートロジーは、「どんな X も X だ」という自明の理を表すのに対して、並列型トートロジーは「X と Y をはっきり区別すべきだ」という有意味な命題を表す。そこで、坂原の理論では、同質化トートロジーは自明の理を表す発話と同じ性質を示し、並列型トートロジーは自明の理を表さない発話と同じ性質を示すと予測される。しかし、言語事実はこれと正反対である。

第一に、自明の理を表す発話は否定できないが、並列型トートロジーも同様に否定できない。これは同質化トートロジーが否定できるのと対照的である(酒井 2006)。

(7) 自明の理を表す発話

a. 太郎は来るか来ないかだ。

- b. *太郎は来るか来ないかではない。
- c. *太郎は来ないし、来る。
- (8) 自明の理を表す発話
 - a. 猫は哺乳類だ。
 - b. #猫は哺乳類ではない。
- (9) 同質化トートロジー
 - a. 今日もやっぱりイチローはイチローだ。
 - b. 今日のイチローはイチローではない。
- (10) 並列型トートロジー
 - a. シロはシロ、タマはタマだ。
 - b. *シロはシロ、タマはタマではない。
 - c. *シロはシロではないし、タマはタマではない。

第二に、並列型トートロジーは自明の理を表す発話と同様に主観性モダリティを表す表現と共起しにくい。これも同質化トートロジーとは対照的である。

- (11) 自明の理を表す発話
 - a. #私は太郎は来るか来ないかだと思う。
 - b. #私は猫は哺乳類だと思う。
- (12) 同質化トートロジー

私はやっぱりイチローはイチローだと思う。
- (13) 並列型トートロジー

#私はシロはシロ、タマはタマだと思う⁷。

小屋は「XはYでない」という自明の理を並列型トートロジーの意味解釈としているので、一応上の言語事実を扱えることになる。しかし、次節で論じるように、この分析にも問題がある。

2.3.3 情報価値

小屋の分析では並列型トートロジーは「XはYでない」と同様に情報価値を持たないと予測されるが、これは言語事実と矛盾する。第一に、独自の情報価値を持たず、もっぱら推論の前提となる発話は下降調の終助詞「よ」と共起しない。

- (14) A: なんで私は名球会に入れないんだ?
- B: あなたは昭和生まれではない{でしょうㄐ#ですよ}。名球会には昭和生まれしか入れない決まりです。

これに対して、独自の情報価値を持つ発話は下降調の「よ」と共起する。

- (15) A: タマってただの雑種だけ?
- B: タマはシャムネコだよ。血統書つきだ。大事にしないと。

ここで、「XはYではない」は下降調の「よ」とは共起しないが、並列型トートロジーはこれと共起する。

- (16) A: なんでタマばかりかわいがるの? シロもかわいがりなよ。
- B: シロはタマじゃない{だろうㄐ#よ}。扱いが違って当たり前だ。
- (17) A: なんでタマばかりかわいがるの? シロもかわいがりなよ。
- B: シロはシロ、タマはタマ{だろうㄐ よ}。扱いが違って当たり前だ。

第二に、並列型トートロジーは「XはYではない」と異なり、情報伝達に用いることができる。

- (18) A: また前回と同じような仕事が発生したんだけど、今回も代わりにお願いできるかな。
B: 前は前回、今回は今回だ。
A: そうか無理か。分かった。(Bは引き受け拒否を伝達)
- (19) A: また前回と同じような仕事が発生したんだけど、今回も代わりにお願いできるかな。
B: #{前は今回はない/今回は前はない}。
A: そうか無理か。分かった。

(18B)は、結論を明示して、「前は前回、今回は今回だから無理だ」と言うとむしろ不自然になる。これは、同じ文脈で「今忙しいんだ」と「今忙しいから無理だ」とがともに使用可能であるのと対照的である。この点で、並列型トートロジーは、仕事を引き受けるのを拒否するための論拠として機能していると言うよりは、それ自体が引き受け拒否を伝達していると考えられる。

2.3.4 まとめ

以上から、並列型トートロジーに関して、(i) 形式と意味との関係、(ii) 自明の理を表すという事実、(iii) 情報価値が存在するという事実、に説明を与える必要がある。

3 拡大メンタル・スペース理論

以下では、前節で提示した問題を解決するために、拡大メンタル・スペース理論を用いる。これは坂原 (1996/2000)、東郷 (1999)、酒井 (2000)を修正した枠組みであり、従来のメンタル・スペースに加えて、一般的知識領域と発話状況に対応する領域を仮定する。全体の構成は(20)のようになる。

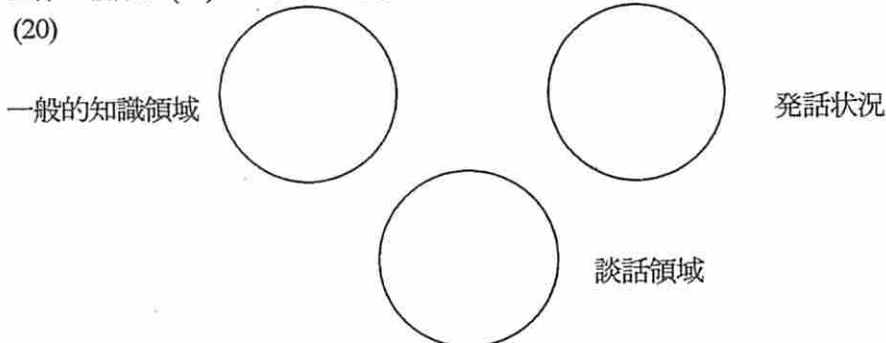


Figure 1: 一般的スペース構成

それぞれの領域は(21)のように定義される。

- (21) a. 一般的知識領域: すでに知っている要素とその属性とが格納される。
b. 談話領域: Fauconnier (1985)のメンタル・スペースが格納される。言語表現によって導入される要素はまずここに書き込まれる。
c. 発話状況: 発話の現場に存在する要素とそれらに関する情報が格納さ

れる。

この枠組みでは、名詞句 N は次のように処理される。

- (22) 名詞句 N の処理: N の探索領域の要素と照合されたあとコネクターによるその対応物を談話領域に導入するかすでに存在する談話領域の対応物を同定する。ただし、コンピュータ文の述語位置に生ずる叙述的 N は新たな要素を導入せず、主語名詞句により導入される談話領域の要素と N の探索領域の要素との結合を合図する。

探索領域と導入されるコネクターは名詞句の種類により定義される。以下の議論に関係するのは(23)に示した場合である。

- (23) a. 固有名詞: 探索領域 = 一般的知識領域
導入されるコネクター: 同一性コネクター IC
b. 普通名詞: 探索領域 = 一般的知識領域
導入されるコネクター = 種・個体コネクター KIC

同一性コネクターと種・個体コネクターは(24)のように定義される。

- (24) a. 同一性コネクター IC: $IC(x) = y$ ならば、 x の定義属性は y に義務的に転送され、その他の情報は、 x と y の間でデフォルト的に転送される。 x と y は同一物とみなされる。
b. 種・個体コネクター KIC: $KIC(x) = y$ ならば、 x は種、 y はその種のメンバーであり、 x の定義属性は y に義務的に転送され、 x に関するその他の情報は y にデフォルト的に転送される。 y に関する情報 $P(\dots, y, \dots)$ は $\diamond P(\dots, x, \dots)$ として x に転送される⁸。

以上の概念を用いると、「シラクは大統領だ」というコンピュータ文は(25)のスペース構成を構築する。

(25)

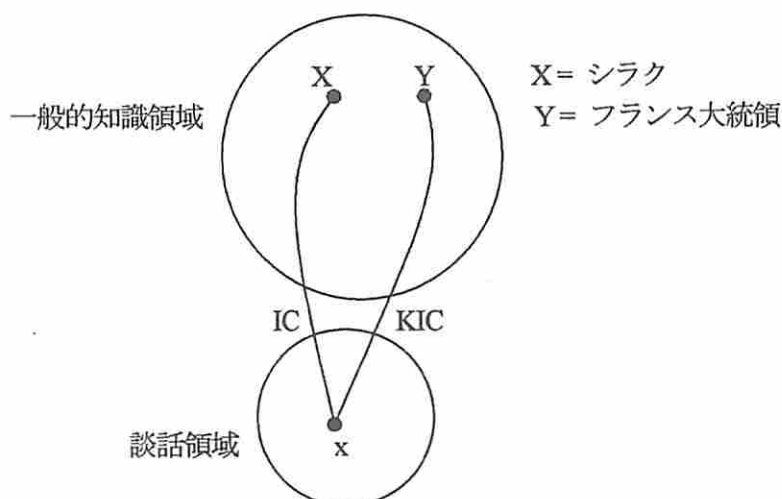


Figure 2: シラクはフランス大統領だ

主語「シラク」は一般的知識領域の X と照合され、談話領域にその対応物 x を導入する。述語「大統領だ」は x と一般的知識領域の Y との結合を断定する。(24)により、情報が X から x 、Y から y に転送され、 x はシラクとしての属性を持ち、かつ大統領としての属性を持つ。ここで、(26a)の情報が得られたとすると、「日本びいきだ」により(26b)の

情報が談話領域に書き込まれる。この情報は(25)の IC により X に転送され、(26c)の情報が得られる。また、(26b)は KIC により Y に転送されるが、(24b)により、(26d)の形式に変換される。これは「(一般に)フランス大統領は日本びいきでありうる」という情報に対応する。

- (26)
- a. シラクはフランス大統領で、日本びいきだ。
 - b. 日本びいき (x) (発話による情報導入)
 - c. 日本びいき (X) ((24a)に基づく IC によるデフォルト転送)
 - d. ◇日本びいき (Y) ((24b)に基づく KIC による情報転送)

4 並列型トートロジーの意味構築

本節では、第3節で提示された枠組みに基づき、並列型トートロジーの分析を行う。まず、並列型トートロジーと説明拒否トートロジー(藤田 1988、坂原 1992)との類似性を指摘する。次いで、説明拒否トートロジーの分析に基づき、並列型トートロジーの意味構築過程を明らかにする。

4.1 説明拒否トートロジー

説明拒否トートロジーとは(27A2)に見られるもので、「XはXだ」という発話によって X に関する説明を拒否する用法である。

- (27)
- A1: 昨日太郎に会ったよ。
 B: 太郎って誰?
 A2: 太郎は太郎だよ。

(27B)は「Xって(Y)?」という形式の疑問文であり、(22)によって X が正しく処理できないこと、すなわち X と照合すべき要素が探索領域内で見つからないことを表明している(酒井 2000)。通常、これに対する返答は(28)のような特徴を持つ。例えば(27B)に対しては(29)のような返答が期待されている。

- (28) X を説明する文の性質
- a. 名詞句 X はメタ形式でマークされる(田窪 1989)。
 - b. コピュラは名前 X を持つ談話領域の要素 x' と一般的知識領域の何らかのカテゴリー要素 X' との間に種・個体コネクターを設定する。
 - c. 談話領域の要素 x' に属性が追加される。
- (29)
- A: 太郎って誰?
 B: 太郎というのは、隣に引っ越してきた 弁護士だよ。
- | | | |
|------|------|---------|
| メタ形式 | 属性追加 | カテゴリー要素 |
|------|------|---------|

このうち最も重要なのは(28b)によるカテゴリー要素の導入である。属性の追加はカテゴリー要素の導入を前提としたものであり、メタ形式は当該の文が(正常な)定義文であることをマークするものである。これに対して、説明拒否トートロジー(27A2)が構築するスペース構成は(30)であり、カテゴリー要素の導入が行われていない。

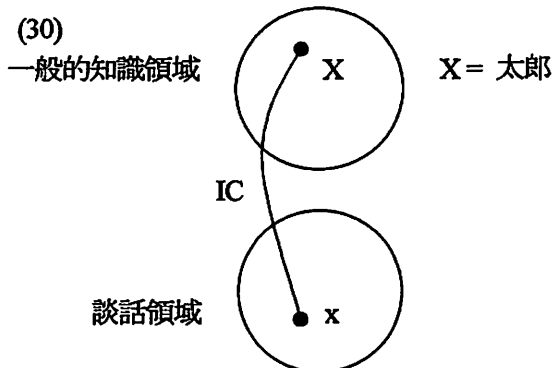


Figure 3: 太郎は太郎だ

- (31) a. 主語「太郎」: Xと照合され、ICにより x を同定
 b. 述語「太郎だ」: IC を断定

スペース構成(30)は(31)の解釈に対応するが、(24)により主語の解釈において X の情報が x に送られ、述語の解釈においてその情報が X に送り返される。すなわち、新情報は何も追加されない。ゆえに説明拒否の含意が生まれる。

ここで、並列型トートロジーと同様に、説明拒否トートロジーは恒真命題を表す。(32)が示すように否定が不可能であり、(33)が示すように主観的モダリティ要素と共起しない。

- (32) A1: 昨日太郎に会ったよ。
 B: 太郎って誰?
 A2: #太郎は太郎ではない。

- (33) A1: 昨日太郎に会ったよ。
 B: 太郎って誰?
 A2: #私は太郎は太郎だと思う。

また、並列型トートロジーと同様に、説明拒否トートロジーは情報価値を持つ。(34)が示すように、説明拒否トートロジーは下降調の終助詞「よ」と共起し、かつ、いかなる命題の前提となることもなく、それ自体で説明拒否を伝達する。

- (34) A1: 昨日太郎に会ったよ。
 B1: 太郎って誰?
 A2: 太郎は太郎だよ。
 B2: 教えてくれたっていいじゃないか。(A2 は説明拒否を伝達)

この事実を(35)のように一般化する⁹。

- (35) 恒真性と情報価値に関する一般化
 恒真的な同一性コネクタ IC の使用は、有意味な種・個体コネクタ KIC の使用の拒否であり、KIC ではなく IC の使用を選択したことが KIC の関連性の否定という情報価値を構成する。

すなわち、情報量のない IC の断定が同じ文脈における KIC の使用の拒否という情報価値を生むということである。これは Ward & Hirschberg (1991) の Grice (1975) に基づくトートロジー分析と基本的なアイディアは同一であるが、「発話」という音声現象に代えて「コネクタの使用」という認知操作に言及している点が大きく異なる。Ward &

Hirschberg (1991)は $X \text{ is } X$ という恒真的な発話を行うことが、当該文脈において $X \text{ is } Y$ という有意味な発話が妥当でないという含意を生むと述べている。(35)は、発話という形式をとるか否かにかかわらず、恒真的 IC の使用が、KIC の妥当性の否定を表すと述べている。コネクターは発話だけでなく推論においても用いられるから、(35)は Ward & Hirschberg (1991)の分析よりも一般性が高い。次節では、(35)を用いて並列型トートロジーの意味構築過程を分析する。

4.2 並列型トートロジーの発話文脈

(36=2)の対話が行われる時点で、(37)のような事態が成立している。

- (36) A: どうしてタマばかりかわいがるの?(シロだって同じ猫なのに)
B: シロはシロ、タマはタマだ。

すなわち、話し手と聞き手がともに知っているタマという猫 X とシロという猫 Y がおり、それらが話題にのぼることにより、それぞれ要素 x 、 y が談話領域に導入される。(36A)により、B は x をかわいがる一方、 y はかわいがらないという情報が書き込まれる。(36A)は B のこの態度を批判しているが、その批判は x と y とがともにカテゴリー「猫」の要素である、すなわち x と y がともに W と KIC によって結合されているという事実に基づいている。具体的には、(36A)は(38)の推論を促している。

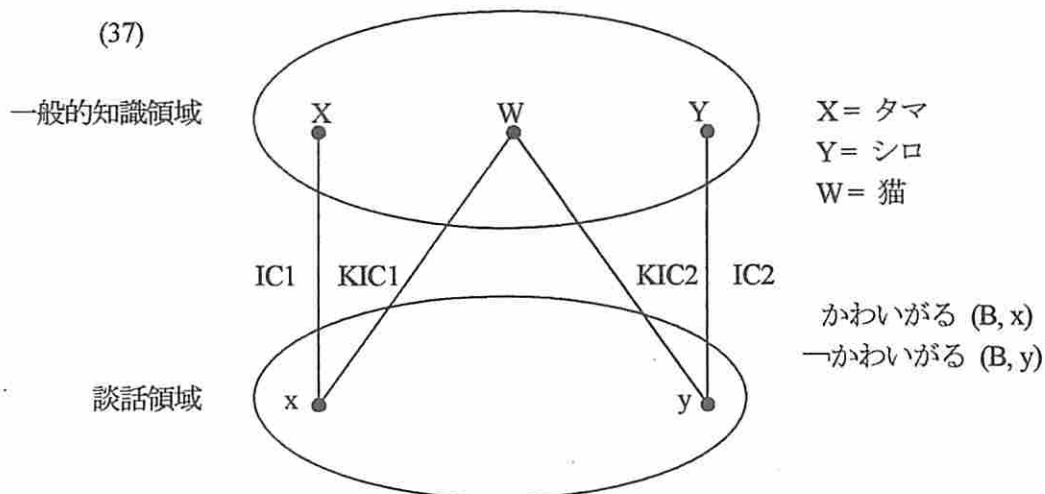


Figure 4: 「シロはシロ、タマはタマだ」の発話文脈

- (38) (38A)が促す推論
- IC (x) = X、ただし X = タマ (状況設定による)
 - IC (y) = Y、ただし Y = シロ (状況設定による)
 - KIC (x) = W、ただし W = 猫 (状況設定による)
 - KIC (y) = W (状況設定による)
 - かわいがる (B, x) (状況設定による)
 - ◇かわいがる (B, W) (c と e より)
 - ◇かわいがる (B, y) (d と f より)
 - ◇かわいがる (B, Y) (b と g より)

「Bはシロもかわいがることができる(はずだ)」

(38)は次の推論に対応する。まず、「Bはxをかわいがる」という情報をKIC1によりWに転送し、「BがWをかわいがることは可能である」に変換する。次にこれをKIC2によりyに転送し、「Bがyをかわいがることは可能である」を得る。さらにこれをIC2によりYに転送し「Bはシロをかわいがることが可能である」という結論を導く。

4.3 並列型トートロジーの解釈

これに対して、(36B)の解釈は次の通りである。

(39) (36B)の解釈

- a. 主語1「シロ」: Yと照合され、IC2によりyを同定
- b. 述語1「シロだ」: IC2を断定
- c. 主語2「タマ」: Xと照合され、IC1によりxを同定
- d. 述語2「タマだ」: IC1を断定

IC2とIC1の断定は情報量を持たないから、(35)により、それぞれKIC2とKIC1の関連性を否定し、その使用を拒否するという情報を生み出す。KIC2とKIC1が使えなければ、xとyとの間の情報転送は不可能になり、(38)の推論は無効になる。この認知操作から、「タマをかわいがるからと言って、シロもかわいがるべきだと考えるのは誤りである」、すなわち「タマとシロを同様に扱うべきだ」という主張は無効である」という意味効果が生まれる。なお、同質化トートロジーと異なり、「Xだ」という述定によってXからxに新たに転送される情報はないので、並列型トートロジーは、「Xらしさ」とは無関係に、すなわちXの属性を全く知らなくても用いることができる(cf. 酒井2006)。こうして、本分析により2.2節で提示した小屋(2002)の観察に理論的説明が与えられる。

5 結論

この論文では次のことを論じた。まず、経験的事実として、並列型トートロジーは恒真命題を表しつつ、かつそれ自体の情報価値を持つ。この情報価値伝達メカニズムは説明拒否トートロジーの場合と同様であり、その分析にはグライス流のアプローチを改良したものが適している。これはグライス流のアプローチが全く妥当せず、純粋に意味論的分析が必要となる同質化(差異否定型)トートロジーとは大きく異なる(cf. 酒井2006)。グライス流のアプローチに基づきつつも、発話という音声現象に代えて、コネクターの使用という認知的概念を用いることにより、説明拒否トートロジーと並列型トートロジーの共通性を捉えることができる。いずれの用法においても、恒真的な同一性コネクターの使用が有意味な種・個体コネクターの関連性の否定を伝達する。

注

¹ 同質化トートロジーは酒井(2006)の差異否定型トートロジーに対応する。

² 「XはXだ」におけるXがメンバー名であるという点で、Xがカテゴリー名である同質化トートロジーと異なる。

(i) 雑種でも血統書つきでも、猫は猫だ。

同質化トートロジー(i)では、Xにあたる「猫」はカテゴリー名であり、X 内部に差異を設けることに反論している。

³ W に慣用的な名前が与えられていない場合もある。

(i) 遊びは遊び、結婚は結婚だ。

坂原 (2002)によると、この場合カテゴリーW はその場で作られる。

⁴ 例文は坂原のものと異なる。

⁵ (4-5)は小屋の例文とは異なる。

⁶ この点で、並列型トートロジーは「も」によるトートロジー「X も X だ」(i-ii)と異なる。

(i) 確かにあいつも悪いけど、お前もお前だよ。

(ii) 息子が息子なら、父親も父親だ。

(i-ii)には非難のニュアンスがあるが、このニュアンスは、「X も X だ」という文の構成要素を合成しても決して出てこない。この意味で、「X も X だ」という形式は非難の意味とともに構文として登録する必要がある。

⁷ 次のような同質化トートロジーの並列として解釈すれば容認可能である。

(i) 私は、歩けなくなってもシロはシロ、よその猫になってもタマはタマだと思う。

⁸ \Diamond は可能性演算子で、例えば $\Diamond P(x)$ は「x が P であることは可能である」という命題を表す。

⁹ (35)はあくまでも記述的一般化であり、理論的説明ではない。(35)を語用理論の中にいかにして位置づけるべきかについてはここでは論じない。

参考文献

- Cadiot, Pierre. & François Nemo. (1997): Analytique des doubles caractérisations, *Sémiotiques* 13 : 123-143.
- Fauconnier, Gilles. (1985): *Mental spaces*, MIT Press.
- Fauconnier, Gilles. (1997): *Mappings in thought and language*, Cambridge : Cambridge University Press.
- 藤田 知子 (1988): 「Une femme est une femme — X ÊTRE X 構文解釈の試み」『フランス語学研究』(日本フランス語学会) 第 22 号: 15-34.
- Grice, Paul. (1975): Logic and conversation, *Syntax and semantics* 3: 41-58.
- 小屋 逸樹 (2002): 「トートロジーと両義性」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 34 号: 1-25.
- 坂原 茂 (1992): 「トートロジーについて」『外国語科研究紀要』(東京大学教養学部) 40(2): 57-83.
- 坂原 茂 (1996 / 2000): 「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」『認知科学』(日本認知科学会) 3-3: 38-58、坂原茂編『認知言語学の発展』、ひつじ書房: 213-249.
- 坂原 茂 (2002): 「トートロジーとカテゴリー化のダイナミズム」、大堀壽夫(編)『シリーズ言語科学 3 認知言語学 II: カテゴリー化』東京大学出版会: 105-134.
- 酒井 智宏 (2000): 「名詞句の探索領域とコンピュータの疑問形」、『言語情報科学研究』第 5 号、東京大学言語情報科学研究会: 143-169.
- 酒井智宏 (2006): 「差異否定型トートロジー」『認知言語学論考』第 5 号、ひつじ書房.
- 田窪 行則 (1989) 「名詞句のモダリティ」、仁田義雄 (編)『日本語のモダリティ』、くろしお出版: 211-233.
- 東郷 雄二 (1999): 「談話モデルと指示: 談話における指示対象の確立と同定をめぐって」『総合人間学部紀要』(京都大学) 6: 35-46.
- Ward, Gregory L. & Julia Hirschberg. (1991): A pragmatic analysis of tautological utterances, *Journal of pragmatics* 15: 507-520.
- Wierzbicka, Anna. (1987): Boys will be boys: 'Radical' semantics vs 'Radical pragmatics', *Language* 63: 95-114.

On tautological utterances of the type "X is X, Y is Y" in Japanese

Tomohiro SAKAI

(Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science)

This paper deals with the meaning construction of tautological utterances of the type "X is X, Y is Y" in Japanese. As Sakahara (1992, 2002) argues, this type of utterance is used to emphasize the difference between X and Y within the category W of which X and Y are members. But Sakahara does not discuss how this meaning compositionally derives from the sentence form "X is X, Y is Y". There are two reasons "X is X, Y is Y" should not be analyzed as a construction. First, in certain contexts, the same meaning can be expressed by the simple form "X is X". Second, this type of tautology is found in other languages such as English and French.

It should be noted that "X is X, Y is Y" has much in common with tautological utterances which express refusal of explanation: both types of tautologies represent a self-evident proposition and also have certain informative value. Within the Mental Space framework (Fauconnier 1985, 1997), this fact can be stated as follows: the use of a self-evident identity connector IC produces the implicature that a meaningful kind-individual connector KIC is not relevant in the context. This generalization is of the Gricean nature except that it mentions the use of a cross-space connector rather than the utterance of a sentence. This cognitive approach allows for a unified analysis of the two types of tautologies mentioned above.

In contexts where "X is X, Y is Y" is used, what is at issue is whether X and Y should be treated in a similar way. The interlocutor insists that they should on the ground that they are members of the same category W. By uttering "X is X, Y is Y", the speaker denies the validity of KICs which link W to X and Y. This prevents the properties of X from being transferred to Y and vice versa. Accordingly, the inference suggested by the interlocutor is rejected.